

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：33501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780486

研究課題名(和文) 小学校教諭の書字能力形成と文字論に関する歴史的研究

研究課題名(英文) The historical study about writing skills of elementary school teachers

研究代表者

鈴木 貴史 (Suzuki, Takashi)

帝京科学大学・生命環境学部・助教

研究者番号：10588809

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校教員養成課程において書字能力が重視されない背景を探るため、近代学校成立以後の「習字」、「書キ方」などの書字教育の意義について歴史的に分析することを試みたものである。その方法として、おもに明治初期から大正期にかけて教育課程および教授法書の分析を行った。その結果として、(1) 学期における「習字」の質的な転換がなされたこと、(2) 「習字」の教育的価値は明治20年代前半に最も低下し、その後、言語教育としての意義が見直されて再評価されたこと、(3) 大正期における国語科「書キ方」が実用偏重ではなく、芸術教育、言語教育として幅広く捉えられていたこと、の3点について確認した。

研究成果の概要(英文)：This study tried to consider educational contents and teachers' skills of writing education, through analyses of curriculum and teaching method books in the Meiji Era and the Taisyo Era. This study was confirmed that (1) writing education was caused cultivative conversion by the educational system "Gakusei", (2) the educational significance of writing education declined remarkably in the 1880s and had the good points of the writing education in the 1890s, (3) writing education in the Taisyo Era was considered to be not only practical education but art education and linguistic education.

研究分野：教育学

キーワード：書字教育 教員養成 習字 国語教育 書キ方

1. 研究開始当初の背景

初等普通教育を担う小学校教諭にとって、読み書き能力は必須であるにもかかわらず、とりわけ書字能力については、教員養成課程においてそれらが重視されているとは言えない現状がある。

その背景として、情報入力機器の普及による手書きの軽視、コミュニケーション能力(話すこと)の重視、書写書道教育の軽視、教員養成課程における板書技術の軽視等が挙げられる。

申請者はこれまで教師論に関する歴史的研究を行い、教師の自己陶冶の必要性を主張してきた。本研究は、書字能力も自己陶冶の一つと捉え、これらの研究を発展させるものとして位置づけられる。

なお、本研究における「書字能力」とは、文字を美しく正しく手書きする能力のことであり、ここには正しい筆順や筆記具の持ち方も含むものとする。また、「習字」、「書道」、「書方」、「書写」等の呼称に対して、毛筆、硬筆にかかわらず手書きによる文字教育を「書字教育」で統一する。

2. 研究の目的

本研究では、こうした小学校教員養成課程において書字能力が重視されない背景を探るため、近代学校成立以後の「習字」、「書キ方」などの書字教育の意義について歴史的に分析していくことを試みたものである。

これまでの書写書道教育史において、書字教育の意義に関する先行研究の主な論点は、毛筆の芸術性を重視する立場から、(1) 学制における「習字」の成立を独立科目として教育課程上重視されていたと捉えること、(2) 国語科「書キ方」を実用偏重として批判的に捉えること、の二点にあった。

要するに、従来の書写書道教育における関心の多くは、毛筆の価値を見出すことにあり、実用性と芸術性という二項対立図式に拘泥することが多くみられた。

本研究においては、こうした二項対立に陥ることなく、書字教育の意義を幅広く捉えることにより、その教育的価値が低下した要因を探究する。とりわけ、本研究では、欧米の教授理論、言語学、芸術教育などの影響について注目しながら、文字を手書きすることの意義、さらに小学校教師が書字能力を身につけることの意義について新たな視座を与えることを目指している。

3. 研究の方法

本研究では、書字教育が軽視されるに至った要因について探るため、明治初期、明治後期大正期、昭和戦前期と、三つの時代区分をおこない、おもに明治初期と明治後期大正期を中心に検討した。

その研究方法として、おもに以下の三つの視点から、教科書、教授法書および雑誌記事を中心として分析を行い、書字教育の教育課

程上の位置づけとその性格について考察を行った。

(1) 明治初期の「習字」が教育課程上、果たして「重点科目」であったのか。

本研究では、学制期における書字教育に関する教育課程および教授理論の分析を行い、近世の手習い教育と比較した「習字」成立の意義について検討した。

また、学制期における「書取」と「習字」について、それぞれの目的と教育方法の相違点について考察を行った。

(2) 明治 20 年代までの「習字」の地位は、「学制」から「第三次小学校令」まで継続的に下降線をたどったのか。

まず、明治 10 年代における教授法書や雑誌記事を参照しながら、音声言語に対する文字言語の教育の関係について考察を行った。また、書字教育が技能教育化していく過程について確認した。さらに、明治 20 年代における言語学や急進的な習字改革論の影響について分析を行い、これらに対する反動としての国語科「書キ方」成立へと導かれる過程を辿った。

(3) 1900 (明治 33) 年からの国語科「書キ方」は実用偏重であったのか。

国語科成立時の理念として「読三方」、「綴り方」と「書キ方」との三領域の連絡があったことを確認し、これが崩れていく過程について確認した。また、当時の「書キ方」教育の代表的な論者として水戸部寅松に注目し、その教授理論について検討を行った。

また、水戸部以外の教授法書を参照しながら、大正期の書字教育における実用と芸術の二項対立の状況について確認した。

4. 研究成果

本研究において得られた成果は以下のとおりである。

(1) 学制期における「習字」の質的な転換がなされたこと

明治学制期の教育課程における「習字」成立についての考察により、近世の手習い教育が有していた総合的な学習としての機能が縮小したことを確認した。近世における書字教育は、字形運筆のための学習というだけではなく、語彙学習、職業教育、道徳教育などの機能も担っていたのに対し、近代学校制度成立以後の「習字」は、字形運筆を主とする学習としてその地位が著しく低下したのである。

また、学制初期においては、欧米から音声言語による教授法が流入したことにより、書字教育科目の一つである「書取」においては、聴写という方法が採用され、字形運筆よりも正しく書ければよいとの考え方がなされる要因の一つとなったことを確認した。

(2) 「習字」の教育的価値は明治 20 年代前

半に著しく低下し、その後、言語教育としての意義が見直されて再評価されたこと。

明治初期における問答教授法に関する教育課程および教授法書を参照することにより、近代学校制度において音声言語による教授法として採用された問答教授法が、当初意図したような成果が得られず、文字言語の習得を目的とする教育に移行していくことを確認した。

おもに米国の教授法として師範学校から持ち込まれた問答教授法は、欧米言語と日本語との相違について考慮されておらず、複数の表記法の存在する日本語による学習においては支障をきたしていたのである。

しかし、問答教授法の挫折により、音声言語に対する文字言語の再評価がなされたものの、字形運筆についてはそれが重要視されることは少なかった。それは、字形運筆を担っていた「習字」が知識を学習するための教科と区別され、身体的活動を中心とする技能教科とされたことによる。こうして、明治10年代に書字教育の価値が低下していったことを確認した。

さらに、明治20年代になると、欧米の言語学の影響を受け、言語に関する教育における文字に対する音声の重視が叫ばれるようになった。たとえば、上田万年による音声言語の重視、森有礼や三宅米吉などによる急進的な書字教育の改革案が提案された。こうした急進的な教授法は、楷書先習、大字先習の伝統的な書法と異なり、行書、細字を中心とする著しく実用性に偏った教授法であった。こうして、明治20年代前半は、書字教育が軽視される傾向がみられたが、その反動として、明治20年代後半に、書字教育における字形だけではなく、字義を見直す気運が高まったことにより、言語教育の一部として国語科「書キ方」が成立したことを確認した。

(3) 大正期における国語科「書キ方」が実用偏重ではなく、芸術教育、言語教育として幅広く捉えられていたこと

「読ミ方」、「書キ方」、「綴リ方」の教材を共有するという三領域の連絡を図るという国語科の理念は、早期に崩壊が始まっていた。その理由として、「読ミ方」における字義を中心とする学習と、「書キ方」において、字形運筆を中心とする学習の効率的な学習順序が異なるためであった。

こうして、言語教育の一部としての価値を見出していた「書キ方」は、結局字形運筆のための科目という位置づけとなり、毛筆の実用的価値の低下とともに、その教育的な意義を失っていったのである。

さらに、東京高等師範学校訓導、水戸部寅松により実用主義的な硬筆書キ方教授法が提唱されたことにより、「書キ方」の意義として実用性が重要視された。その一方で、水戸部らの硬筆実用主義に対する反動として、

毛筆の芸術性を重視する立場からの反論もみられ、「書キ方」教育は、実用性と芸術性、硬筆と毛筆という二項対立の構図がみられた。こうした二項対立に対して、新たな提言を行った人物が佐藤隆一であり、佐藤は、実用性、芸術性に加えて言語教育としての意義について提言したことを確認した。

以上のように、本研究の成果として、書字教育における意義の一つとして、実用性、芸術性に加えて、言語教育としての機能があり、これが書字教育の教育的価値を再評価する上で重要であることを確認した。

今後、こうした大正期に得られた書字教育の意義が、昭和戦前期において芸能科「習字」としていかにして毛筆芸術主義へと偏りをみせていくのかについては今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

鈴木貴史「明治初期の教授法における文字および書字の機能」『筑波大学教育学系論集第40巻第2号』(査読有), 2016年.

鈴木貴史「わが国の教員養成課程における実践的指導力としての文字言語の意義」『帝京科学大学教職指導研究第1巻第1号』(査読有), 2016年.

鈴木貴史「明治初期における書字教育の技能教育化」『国語科教育78』(査読有), 2015年.

鈴木貴史「東京高等師範学校附属小訓導水戸部寅松の業績と書字教育論1(理論編)」『人文科教育42』(査読有), 2015年.

鈴木貴史「東京高等師範学校附属小訓導水戸部寅松の業績と書字教育論2(資料編)」『人文科教育42』(査読有), 2015年.

鈴木貴史「明治学制期における書字教育の分化と教授理論」『東京福祉大学大学院紀要第4巻1号』(査読有), 2013年.

[学会発表](計5件)

鈴木貴史「大正期「書キ方」教育における国語科理念の衰退」, 学会名 全国大学国語教育学会, 2015年10月24日.

鈴木貴史「大正期書キ方教育における二項対立の克服」, 全国大学書写書道教育学会, 2015年10月11日.

鈴木貴史「明治20年代の書字教育における文字論」, 読書学会, 2015年8月8日.

鈴木貴史「明治初期における書字教育の技能教育化」, 筑波大学日本語日本文学会, 2014年10月4日.

鈴木貴史「明治初期問答科教授法と書字教育」, 日本教育方法学会, 2013年10月6日.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 貴史 (SUZUKI TAKASHI)

帝京科学大学・教職センター・助教

研究者番号：10588809